

APT相場は需要弱いも精鉱価格の下支えで高値維持か

タングステンの中間原料・APTの国際相場（バラタングステン酸アンモニウム、ヨーロッパ・アメリカ）は、23年11月から今年4月まで310ドル/Mtu前後で横ばい推移が続いていたが、4月下旬から急上昇に転じ、足元で350ドルと22年5月以来の高値を付けている。タングステンの世界需要は、主用途の超硬工具が20年後半からコロナ禍による低迷から復調し、22年前半まで堅調に推移してきた。だが、年後半からは半導体・部品不足による自動車各社の減産にくわえ、主要国の金利上昇や中国の景気減速などで世界経済の先行き不透明感が高まり、需要が再び縮小に転じた。23年以降は自動車生産が供給制約の解消に伴い回復に向かっているものの、中国経済は依然として停滞が続いており、需要の回復にはなお時間を要するとの見方が強い。タングステンの中間原料・合金鉄・スクラップを長らく取り扱ってきたNIC Resourcesの**西野元樹社長**に今年7～9月の相場見通しを寄稿してもらった。

APT相場は23年11月から横ばい推移も4月に上昇

タングステンの中間原料APTの国際相場（CIFロツェルダム/バルティモア）は、4月末からようやく相場が反転し、6月下旬時点で335～360ドル/Mtuまで上昇した。

新型コロナウイルス感染拡大により、APT相場は20年7月まで200ドル前後と低迷を続けてきたが、その後、コロナ禍からの需要回復や在庫積み増しなどにより上昇に転じ、22年4月には18年6月以来、約4年ぶりに350ドルを回復した。

その後約2年に渡り、なだらかな減少傾向が続き23年11月から300～325ドルで動きがなかったものの、今年4月末から急激な上昇に入った。

中国の環境査察で精鉱のタイト化が進み相場が急騰

この背景にあるのは精鉱供給で世界の8割のシェアを持つ

中国での環境査察である。中国の超硬工具需要は引き続き低調なものの、環境査察により3月以降、精鉱の供給量が減少。中国内での精鉱のタイト化が進み、年初では12万元/t前後だった精鉱相場が5月中旬には15.7万元まで急騰した。これにより中国内APT相場も高騰。5月後半には23万元/tを超えることになるが、国際相場と同じドル/Mtu換算した場合、360ドルを超える水準となる。

これらの動きにより、APT国際相場も4月末から上昇に転じ、5月末に335～360ドルをつけ6月下旬時点でも同水準を維持している。

西側需要は低迷続き中国のAPT・YTO輸出も低調

一方で、日本を含めた西側でのタングステン需要に改善の兆しは見られていない。西側需要の低迷から中国の23年のAPT輸出は1,925t（W純分）と前年比38.7%減少し、YTO（酸化タングステン）の輸出も4,009t（同）で同45.3%減と大きく縮小した。

今年1～4月のAPT輸出は537tと前年同期比24.2%減り、YTO輸出は1,270tで同7.7%減と、今年に入ってもさらに中国のAPT、YTO輸出は縮小が続いている。

環境査察の終了で中国相場が軟化も当面は高値維持

ただし、今回の相場上昇の最大の要因である中国での環境査察は6月前半に終了しており、中国内での足元の精鉱相場およびAPT相場は若干軟化しているため、APT国際相場がさらに上昇していく余地は小さい。一方で、中国精鉱相場は軟化したものの、依然足元で14.9万元と過去10年来の高値を維持しており、この先すぐに大きく下落するとも考えがたい。

スポット需要が弱く相場は動きの少ない状態続く

また、7～9月に西側でのタングステン需要が大幅に改善するとも考えがたく、引き続きスポット需要が非常に弱い水準が維持され、再度、相場の動きの少ない状態となると考える。そのため、7～9月のAPT国際相場は足元の水準を維持するか、仮に調整が入るにしても若干の下落に留まり、320～360ドルの水準で推移すると予想する。